



文化財愛護
シンボルマーク

鹿野町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業
(一般) に伴う柄杓目遺跡試掘調査報告

1988・3

鳥取県気高郡鹿野町教育委員会

序 文

鹿野町におけるほ場整備事業の進展は、旧来の田園風景を大きく変貌させています。このような状況の中で、祖先の貴重な文化遺産である埋蔵文化財も時を追って増加し、保護か破壊かの選択に常に迫られるに至っています。

今回の試掘調査は、団体営柵杓目地区土地改良総合整備事業（一般）に伴い実施したものです。

この地区も、従前の耕作などにより、一帯から土器が出土することが知られていましたので、踏査しましたところ、土師器・須恵器の散布が見られました。このため、土地改良関係者と協議しました結果、土地改良事業から遺跡を保護するために、その範囲を確認して事業との調整資料を得る必要が生じ、国庫及び県費の補助金を受けて試掘調査を実施しました。

調査に際しましては、土地所有者の方々をはじめ、作業従事者等関係各位の格別なご協力、ご尽力を賜り、ここに厚くお礼申し上げます。特に、鳥取県埋蔵文化財センターの適切なご指導、ご助言をいただき、調査を無事終了させ、本報告書が発刊できましたことに厚く感謝申し上げる次第です。

本書は、報告書としては甚だ満足すべきものではありませんが、関係者の皆さんにご利用いただければ幸いに存じます。

なお、今後、工事の進展に伴い、多くの埋蔵文化財の発見が考えられますので、今後とも地元の皆さんはじめ各位のご指導・ご協力をお願い申し上げはす。

1988年3月

鹿野町教育委員会

教育長 砂川正美

調査関係者

団長 鹿野町教育委員会教育長 砂川正美
調査指導 鳥取県教育委員会文化課
鳥取県埋蔵文化財センター
調査員 鹿野町教育委員会社会教育主事 津中喜史
事務局 鹿野町教育委員会次長 山本 享
作業協力者 谷川春雄・山田郁雄・木村辰男・唯 長春・三村勝美・永原義男・原田
勇・三村善信・大谷萬寿子・木村多摩枝・津中正子・三村きみ子・岡田
珠美・谷川とみ・永原美津子
土地協力者 三村勝美・谷川春雄・高本晃・吉田護・砂川正美・小谷稔・加藤卓・小
畠源堂・梶川聿乃・小林一夫・唯弥太郎・谷口勝利
その他協力者 小畠源堂・八峰建設㈱・大谷ブリキ店

例 言

1. 本書は、国庫及び県費の補助金を受けて鹿野町教育委員会が昭和62年度に実施した鹿野町内遺跡（柄杓目遺跡）発掘調査の報告である。
2. 発掘調査事業は、団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業（一般）に伴い、試掘調査として実施した。
3. 本書の執筆は、津中が行った。
4. 本書に収載した実測図の原図作成・製図及び遺構・遺物の写真撮影は、津中が行った。
5. 遺物の実測は、津中と岡田が行った。
6. 遺物番号は、本文・挿図・図版にわたって統一した。
7. 使用した地図のうち、挿図1は鹿野町発行1万分の1鹿野町都市計画総括図、挿図2は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、挿図3は鹿野町発行の1千分の1団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業（一般）平面図である。
8. 実測図中に示してある北は、磁北である。
10. 発掘調査で得られた日誌・図面類・出土遺物は、鹿野町教育委員会に保管する。

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の内容	4
第1節 調査の概要	4
第2節 各トレンチの概要	7
第3節 出土遺物	16
第4節 まとめ	23

挿図目次

挿図1 周辺字限図	
挿図2 鹿野町遺跡分布図	2
挿図3 トレンチ配置図	5～6
挿図4 第1・2・4・5トレンチ平面図及び土層図	9～10
挿図5 第7・11トレンチ平面図及び土層図	11～12
挿図6 第12・13・15・16トレンチ平面図及び土層図	13～14
挿図7 第18・19トレンチ平面図及び土層図	15
挿図8 繩文土器・弥生土器・土師器実測図	18
挿図9 土師器・須恵器・中世の土器実測図	19
挿図10 中世の土器・金属製品・石器実測図	20

表目次

表1 各トレンチ一覧表	4
表2 遺物出土地対照表	22

図版

図版1 遺跡遠景（南西より）・遺跡遠景（東より）	
図版2 第1・2・4・5トレンチ	
図版3 第7・11・12・13トレンチ	
図版4 第15・16・18・19トレンチ	

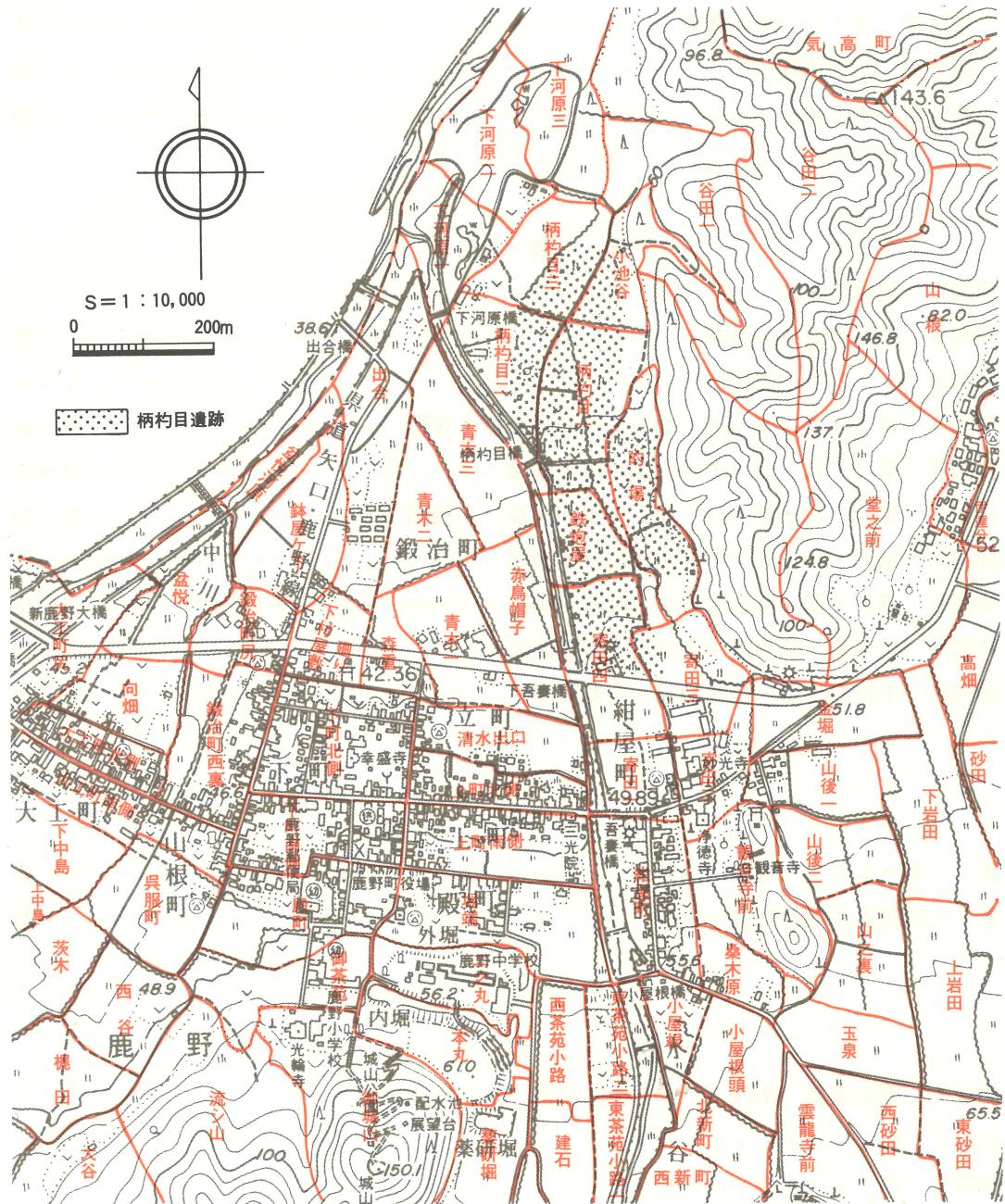
図版5 繩文土器・弥生土器・土師器

図版6 土師器

図版7 須恵器

図版8 金属製品・石器

図版9 中世の土器



挿図 1 周辺字限図

第1章 調査に至る経過

柄杓目付近は、従前の耕作などにより、一帯から土器片が出土することが知られており、この地域が団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業（一般）に伴う昭和63～66年度の施工工事地域に含まれていたため、この遺跡の破壊が心配されていた。このため、試掘調査を実施し、遺跡の範囲を確認して、土地改良総合整備事業との調整資料を得る必要が生じ、国庫及び県費の補助金を受けて昭和62年8月26日から現地調査（試掘調査）を開始した。

第2章 位置と環境

柄杓目遺跡は、鳥取県気高郡鹿野町大字鹿野字柄杓目一、字柄杓目二、字柄杓目三、字的場、字鉄炮屋、字寄田四、字小池谷にあり、JR浜村駅より南へ約7kmの位置にある。

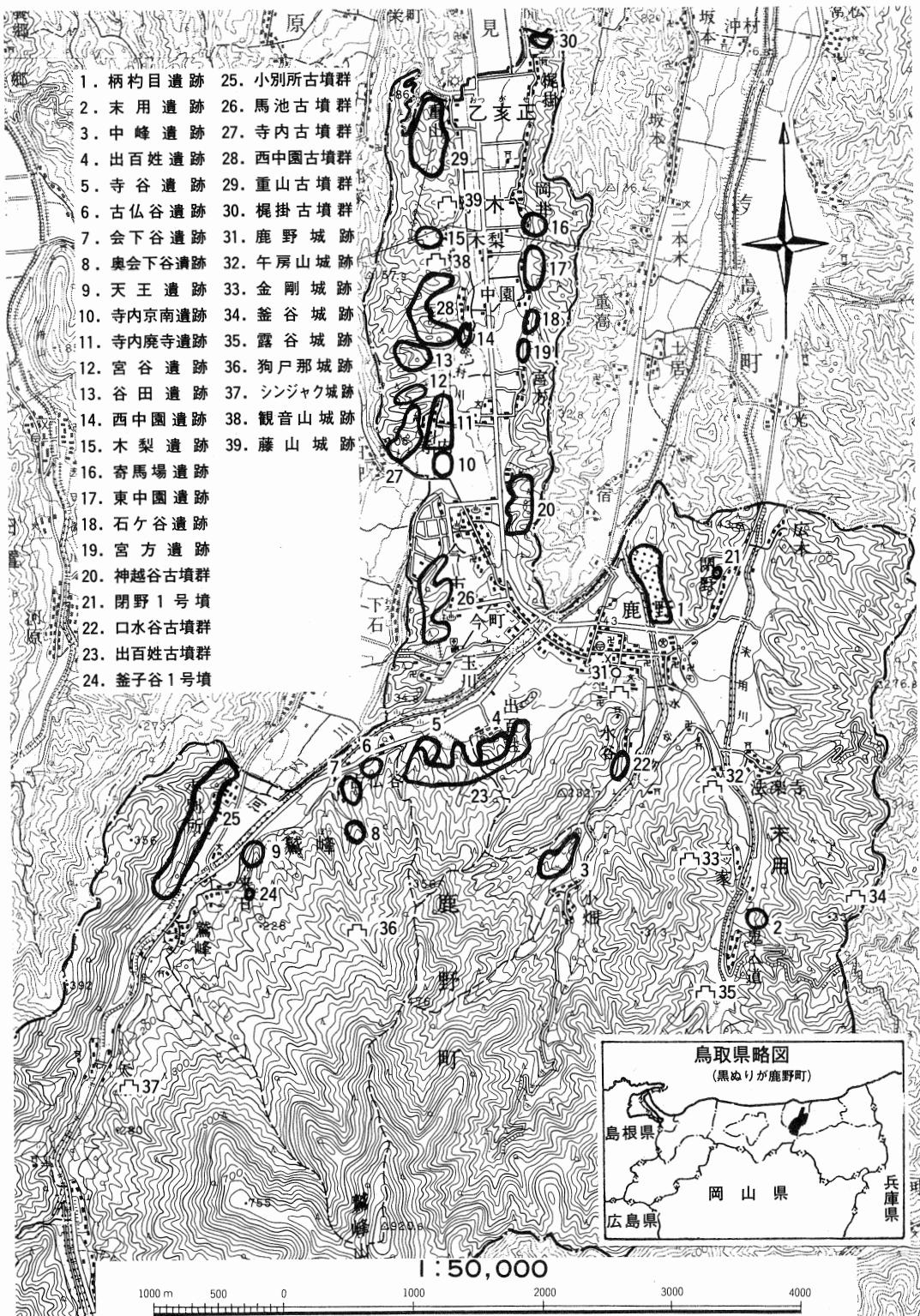
鹿野町は、鳥取県の中央よりやや東に位置し、鷲峰山（921m）の北西に広がっている町である。鷲峰山の南には、1000m前後の山地が連なっている。東西には、300m～500mほどの山地が日本海にのび、鳥取市、気高町、青谷町との境をなしている。

大字鹿野は、鷲峰山の北尾根の先端部にある城山（鹿野城跡）の麓にあり、水谷川と河内川に狭まれて形成された扇状地の三角地帯とその周辺にある。柄杓目地区は、この水谷川と河内川の合流する三角地帯の頂点の東に位置する。

鹿野町には、川は河内川とそれに流れ込む水谷川と末用川がある。河内川は、南北に長い逢坂谷と勝谷の河谷平野の谷頭を切る断層線（吉岡鹿野断層線）に沿ってその流路を変えて宝木谷を北流している。逢坂谷・勝谷の両谷は空谷となつたが、かっての河内川の河岸段丘が逢坂谷の上原・山宮付近・勝谷の寺内・中園付近にみられる。水谷川は水谷を北流し、城山山麓付近（現在の鹿野城跡の堀）で西に折れ、さらに北に折れて河内川に合流し、また末用川は法楽寺付近で西に方向を変え、妙光寺山（柄杓目地区のすぐ東の山）に当たり、現在の水谷川のあたりを流れていると伝えられている。鹿野城主亀井茲矩の城下の改修で水谷川・末用川の流路が変更されたという。現在も鹿野のあちこちでその河道跡がみられ、水田や用水路に利用されている。

これら3本の新旧河道の河岸段丘の周囲には、現在153の遺跡がある。そのなかで、縄文時代の遺跡として明確なものは存在せず、遺物散布地が数ヶ所指摘されるのみである。寺内廃寺遺跡の石鎌・石斧・磨石・閉野の局部磨製石斧、今回報告の柄杓目遺跡の深鉢・石斧など、各々の単独の採取品のみである。

弥生時代の遺跡としては、当遺跡に遺物をともなつた円形の竪穴住居の検出があった。また、寺内廃寺遺跡・寺内京南遺跡などで若干の弥生土器片の出土が確認されている。



挿図 2 鹿野町遺跡分布図

古墳は、横穴も含め128基あり、その大部分は勝谷にあり、特に勝谷地区西側の山麓に集中している。古墳の内部主体及び形状は、板状石材を利用した横穴式石室をもった小規模な円墳がほとんどであるが、前方後円墳や方墳もある。代表的な古墳は、巨大な横穴式石室をもつ西中園8号墳。朱塗りの箱式石棺で中から鉄刀の出た神越谷6号墳。町内で一番大きな円墳の神越谷9号墳（直径19m）、馬ノ池1号墳。前方後円墳の重山9号墳・出百姓13号墳。方墳である重山11号、12号、23号墳。横穴の西中園横穴群。山頂部にかたまっている重山古墳群。小規模の古墳が36基も集まっている小別所古墳群などがある。また、口水谷古墳群の調査が昭和56年に行われ、たくさんの出土品（金環・銀環・小玉・鉄器など）があり、7世紀の前半頃に築かれた古墳であることがわかった。

古墳時代の堅穴式住居は、当遺跡と寺内京南遺跡から検出されている。また、当遺跡から6世紀初頭の土器をともなった木棺墓の可能性のある土廣が検出されている。

奈良時代の遺跡としては、河内川の中流域西岸に条里制の遺構が気多郡最大の規模でみられ、寺内廃寺跡、上原遺跡（気高郡衙推定地）がある。奈良・平安時代において、このあたりは因幡国と伯耆国とを結ぶ山間の交通の要所であり、河内川中流西岸の地は、気多郡の中心地であった。そのため、中世以降もこの周辺を中心に城・土居・寺社が造られている。

中世末から近世初頭にかけては、国衆・地侍の拠点となった鹿野城を中心にが移るようになり、気多郡の中で鹿野の城下が政治・経済・交通・軍事・宗教・文化などの面での中心になった。

鹿野城主となった亀井茲矩は、初期の所領が気多郡一郡のみで、鹿野が気多郡の東端にあり、すぐ東の山嶺が所領の境界をなした。そのため、城と所領境が近く、特に城の北東の地の防御的配慮を行ったと考えられる。当時、鹿野には寺院が9つあったが、「上町南裏」に三光院、「寄田」に妙光寺と淨徳寺、「觀音寺前」に觀音寺、「屋敷廻り」に凌泰寺（雲龍寺の前身）、「東茶苑小路」に興国寺（現在は存在しない）など6つが北東に集中している。さらに、町の北辺の「的場」、「鉄炮屋」には、その地名から射撃練習場と足軽屋敷があったと推定される。また、水谷川の流路を改修し、内堀、外堀、薬研堀をつくり、川をまっすぐ北流させたものも北東の防御的配慮からであったと考えられる。

柄杓目地区には、現在は気高町宿にある志加奴神社があったといわれている。これを移転したものも茲矩だという説もあるが、柄杓目のどの地にあったか定かでない。

また、柄杓目の妙光寺山には葭ヶ谷があり、池田輝澄（石入公）の息女良姫の墓が。亀井茲矩の家臣湯次郎右衛門の墓がその南丘に。また、良姫の墓の西の的場の高台西端部には、「寛永七十月廿五日」の日付の入った墓石と数基の五輪が散在している。

第3章 調査の内容

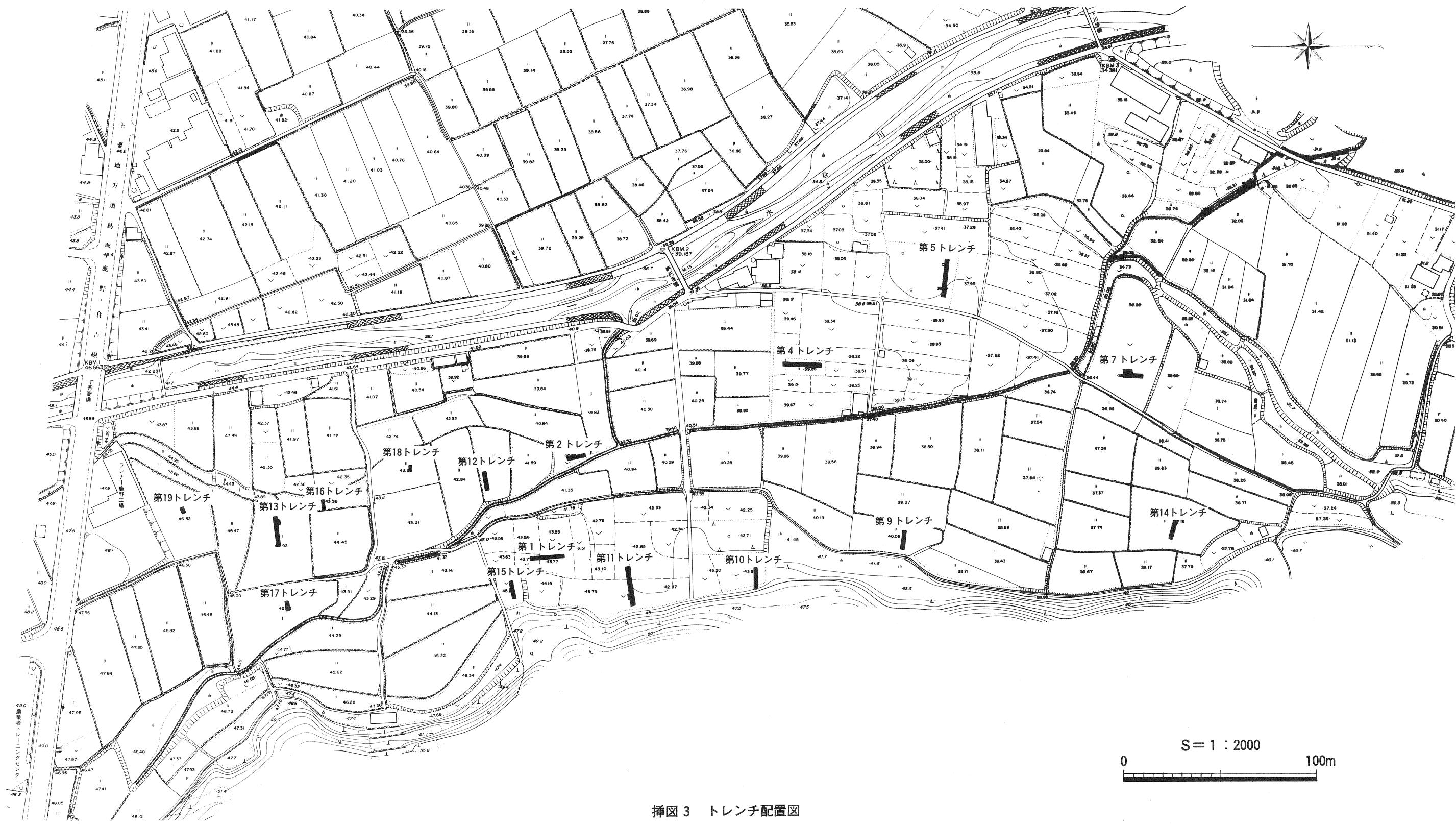
第1節 調査の概要

柄杓目地区は、踏査の段階でかなりの土器散布が見られた。確認された土器散布地を枠で囲い、まずそれに沿って11本のトレンチ個所を決定した。これを、年度当初、関係者と協議した結果、畑は既にほとんど作付けされており、田も既に水田準備に入ってしまっていたため、調査時期を2期に分け、畑は作付けの分の収穫の終わる8月下旬から、田は稲の刈取りの終了する10月下旬から調査することにした。

現地調査は、昭和62年8月26日から開始した。7本のトレンチ（T1・2・4・5・7・10・11）を発掘し終わった時点で、古墳の可能性のあるもの1基、堅穴式住居5棟、土壙1基、石列、ピットが検出され、遺構はさらに南北に広がっていることが確認できた。稲刈り後、予定を変更し（T3・6・8を中止）、遺構の範囲として想定した枠の外の南と北に2本づつ（T9・12・13・14）を設定して調査したところ、北への広がりは確認できなかったが、南には河原石がぎっしり入った溝とピットが検出された（T13）。このためさらに南の鹿野バイパスのランナー鹿野前にT19を設定し発掘したところ、木棺墓の可能性のある土壙が検出された。T1からT19まで計画変更で中止した3本を除く16本、約374m²を調査し、縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良時代から平安時代、鎌倉時代から中近世の遺構、遺物を、広い範囲で確認した。

トレンチ番号	トレンチの大きさ(m)	遺構	遺物 (カッコ内は時期)	トレンチ番号	トレンチの大きさ(m)	遺構	遺物 (カッコ内は時期)
T1	2×18	版築状土層 ピット 2	出土しなかった	T9	2×10	検出できなかった	出土しなかった
T2	2×10	土壙（墓？） (S X 01) ピット 1	土師器（古墳前期・ 14～15C） 火鉢 石包丁 扶り高台付白磁 (墨書き) (15C)	T10	2×10	検出できなかった	出土しなかった
T4	2×20	古墳の可能性のあるもの 1 (S X 02) 堅穴住居 2 (S I 01・02) ピット 多数 溝 1 (SD 01)	弥生土器（後期） 土師器（古墳前期・奈良） 須恵器 陶器 (平安終り～鎌倉 ・14～15C)	T11	2×20 0.9×2.2	石列 版築状土層 ピット 4 溝 1 (SD 03)	土師器(14～15C) 鉄器 古銭 須恵器
T5	2×20	溝 1 (SD 02) ピット 多数	土師器（古墳前期・ 14～15C） 須恵器 (6C末～7C初)	T12	2×10	検出できなかった	縄文土器 土師器(古墳前期)
T7	2×10 2×5	堅穴住居 3 (S I 03・04・05) ピット 4	弥生土器（後期） 土師器（古墳前期） 須恵器 石錘、敲石	T13	2×15 1.5×2.5	溝 2 (SD 04・05) ピット 2	石斧 須恵器(8C後半)
				T14	2×10	検出できなかった	土師器(14～15C) 須恵器(8C後半)
				T15	2×10	土壙（墓？） 1 (S X 03)	人骨
				T16	2×5	溝 1 (SD 06)	出土しなかった
				T17	2×5	検出できなかった	出土しなかった
				T18	2×3	ピット 4	出土しなかった
				T19	2×3	土壙(木棺墓？) 1 (S X 04) 溝 1 (SD 07)	土師器 須恵器(7C初頭)

表1 各トレンチ一覧表



挿図 3 トレンチ配置図

第2節 各トレントの概要

第1トレント (T1)

耕土の下に黒褐色土層・暗褐色土層・明黄褐色土層・黒褐色土層、褐色土層・明褐色土層・明褐色土層・暗赤褐色土層と続く版築状土層を検出した。また、第2層を掘り込んだピット2つを検出したが、これは、T11の石列より後世のものと考えられる。遺物は出土しなかった。

第2トレント (T2)

耕土下黒褐色シルト層の下に約20cm黒色土シルト層がある。中央東側で、第2層より掘り込まれている土壙 (S X01) を検出した。長軸をほぼ南北方向にとっており、長軸の長さ4.5m、短軸の長さ0.6mを測った。出土遺物としては、土壙南端より石包丁、4世紀後半の土師器甕、14~15世紀のものと考えられる灯明皿、抉り高台をもつ墨書き入り白磁小皿などがある。

第4トレント (T4)

このトレントの南半分は約40cmで、北半分は約60cmでロームの遺構面に達し、竪穴住居跡2棟 (S I01・S I02)・古墳の可能性のあるもの (S X02)・溝 (S D01)・ピットを検出した。S I01はS X02の一部を切り取りつくられており、S I01の中央より奈良時代のものと考えられる土師器の甕が出土している。S D01は古墳の周溝になる可能性がある。遺物の大半は、弥生時代後期から古墳時代前期の土師器、須恵器である。

第5トレント (T5)

耕土下に約20cmの黒色土と黒褐色土の攪乱層がある。その下で安定した黒褐色土層の遺構面に達し、散在するピット及び西側に溝 (S D02) を検出した。溝上層第2層より4世紀後半の土師器、14~15世紀の土師質土器が出土している。

第7トレント (T7)

耕土下には、約20cmの黒褐色土層、その下に約40cmの黒色土層があり、遺構面に達する。竪穴住居跡3棟 (S I03・S I04・S I05) とピットが検出された。S I03はS I04を切っている。出土遺物の量は夥しく、大半は弥生時代後期から古墳時代前期の土師器である。

第9トレント (T9)

耕土下床土第2層は、酸化鉄混り黒褐色土層で、西方に約5°傾斜している。第3層黒色土層も西方に傾斜している。深さ85cmまで掘り進めたが、第3層はさらに下方に続いていたので作業困難となったため途中で調査を中止した。遺構、遺物は検出できなかった。

第10トレント (T10)

層厚約20cmの耕土層下位に、T1の第6層と同じ礫混り褐色細砂土層があり、遺構も遺物も認めるることはできなかったので、調査を中止した。

第11トレンチ (T11)

東側の耕土下約50cmで黒褐色粗砂土層で、石列と土器を含む溝 (S D03) が現われた。石列は、東西と南北に直角でトレンチ外へつづくL型のもの1組とその北方約1.2cmのところにL型石列の東西方向に平行した約1.3mの長さのもの1組である。L型のものは、石の面の西面と南面が揃えてある。L型の北にある石列は、不揃いである。石は、全て河原石で、そのほとんどが赤みをおびている。L型石列の内側のにぶい黄褐色粗砂土層の下層は礫混りにぶい黄橙粗砂土で版築状である。石列の下層は黒褐色細砂土で、この層は西に傾斜するにぶい黄褐色粗砂土を地山に約80cmの厚さで西方に水平にのびている。溝は、石列の真西に南北に約1.4mの幅で、黒褐色細砂土面にあり、多量の灯明皿と銅銭・鉄釘等が出土した。この溝の深さは約10cmである。出土品より14~15世紀のものと考えられる。

第12トレンチ (T12)

東西に設定したトレンチの西端より3m付近で急に東方へ落ち込む黄褐色シルト層を地山面としてそれぞれの層も東方へ傾斜している。この急に落ちこみかけるところの耕土下約30cm付近の黒褐色シルト層より縄文土器(晚期)が出土している。鹿野町では初めてである。地山面の傾斜に沿って約1.3mの深さまで進むが、遺構・遺物も出ず、多量に水分を含んでいるために作業困難となり、第7層黒色シルト層の途中で調査を中止した。

第13トレンチ (T13)

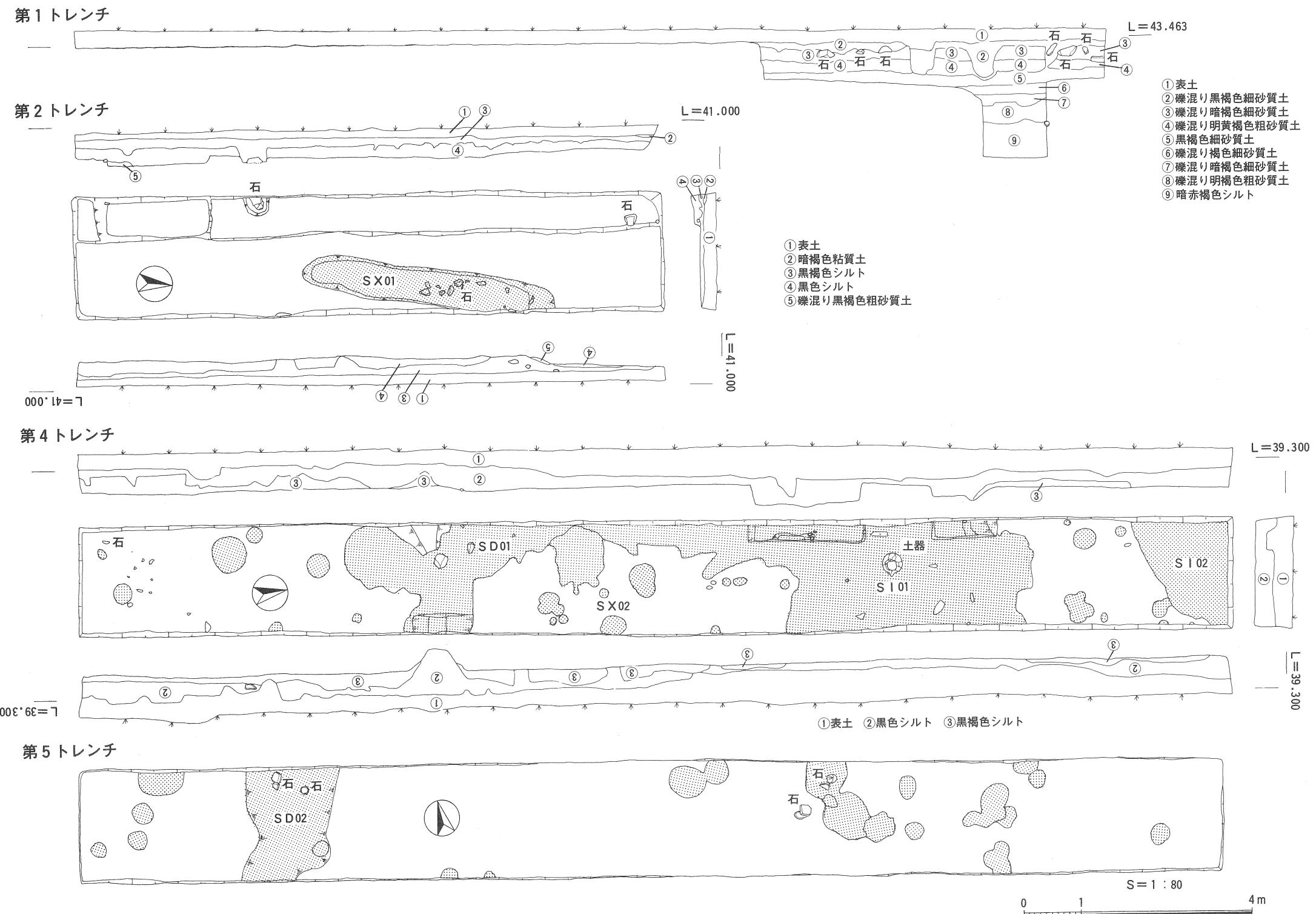
深さ約40cmで褐色ローム層の地山面に達し、この面で明瞭なピット2個と溝2本 (S D04・S D05) が検出された。黒色土は、S D05の西に僅かに残るのみで、大部分は削土されている。S D04は、幅約4mで、深さ約40cmで、大小多数の河原石が埋積している。S D05は、幅1.2m、深さ30cmである。S D05は第2層より、S D04は第7層より掘り込まれており、後者はかなり古い時代のものである。このトレンチより使用痕の入った石斧(縦斧)が出土している。

第14トレンチ (T14)

第3層までは、各層とも水平である。第4層は、トレンチ中央付近から西へ約3°ほど傾斜している。第4層黒褐色細砂質土層は、水分を多量に含んでおり、作業困難のため、約80cm進んだ第4層の途中で作業を中止した。トレンチ東端の第4層中にさらに礫混り暗褐色粗砂質土層(第5層)があり、8世紀後半の須恵器(杯蓋・高台付壺)、14~15世紀陶器などが出土している。

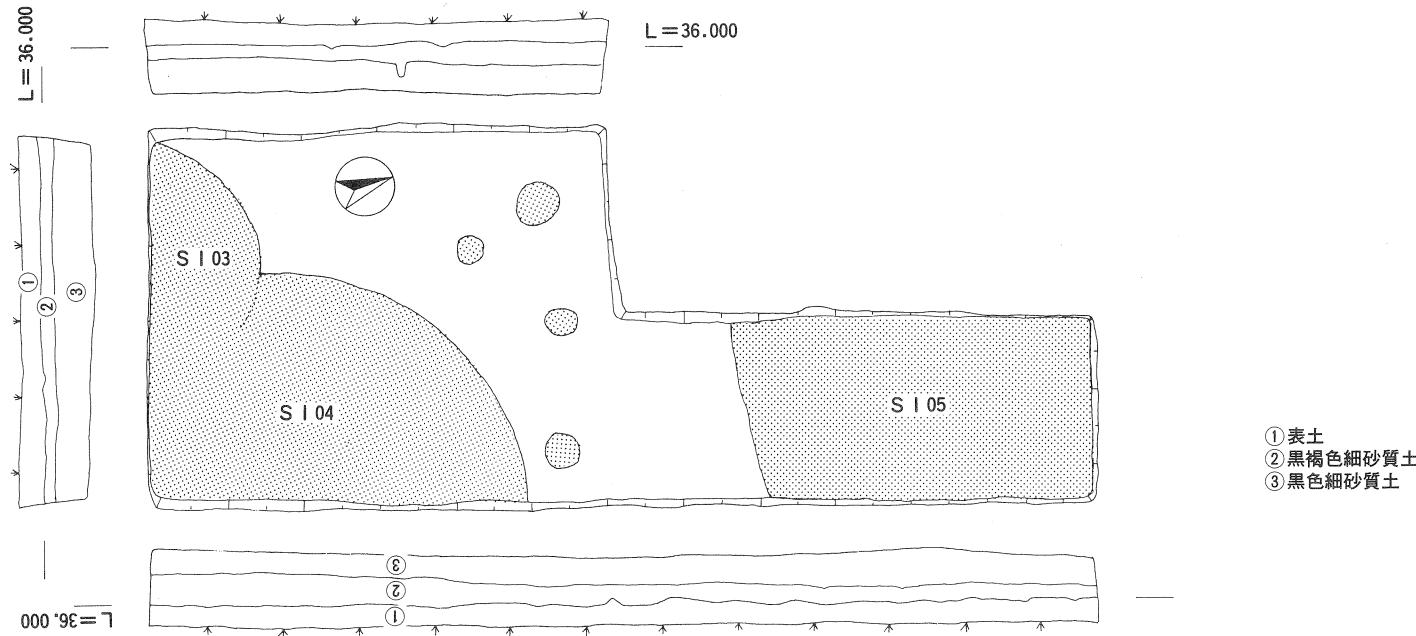
第15レンチ (T15)

第2層暗褐色細砂質土層からは、人骨と土壙が、さらに第3層黒色細砂質土層からも人骨が検出された。人骨はいずれも風化が進んでいて採取不能であった。このトレンチの隣には古墓石と五輪石が散在し、土壙は古墓の可能性がある。

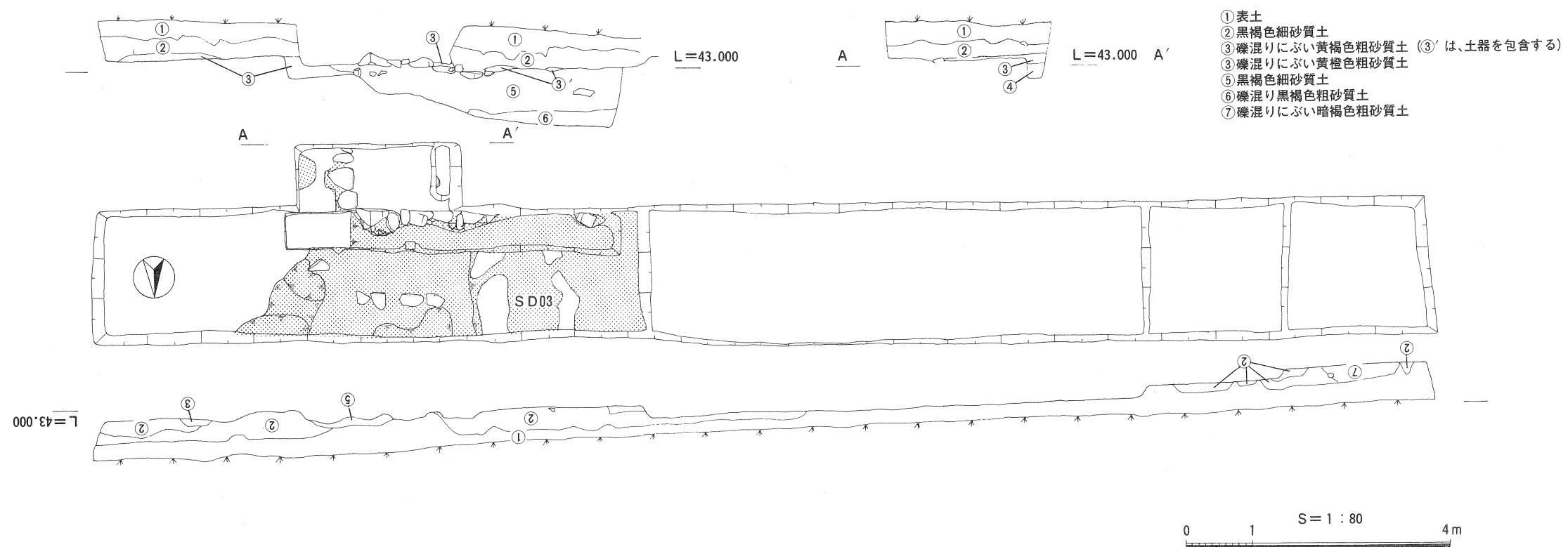


挿図4 第1・2・4・5トレンチ平面図及び土層図

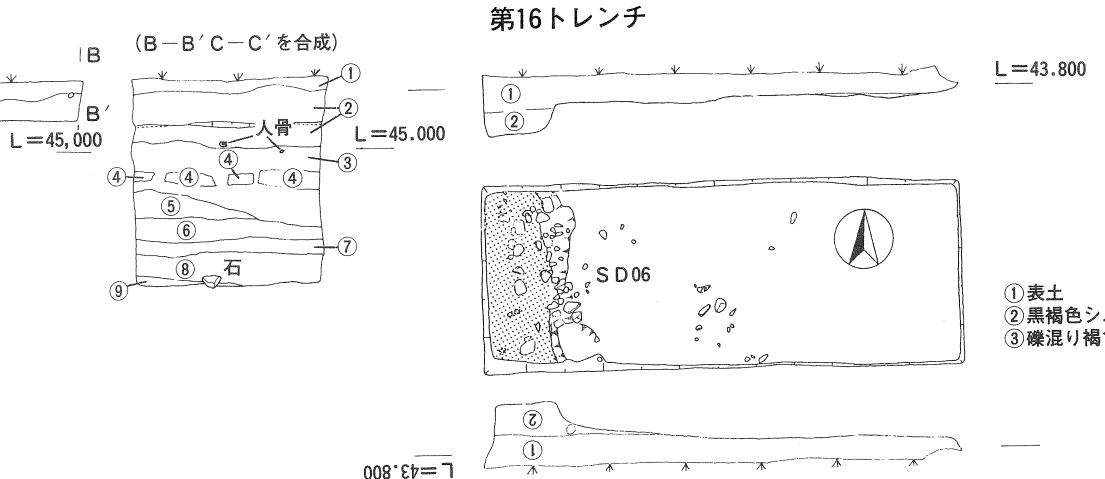
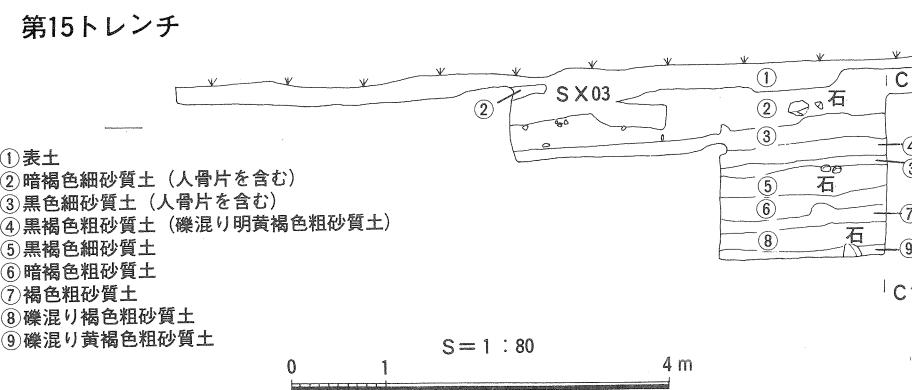
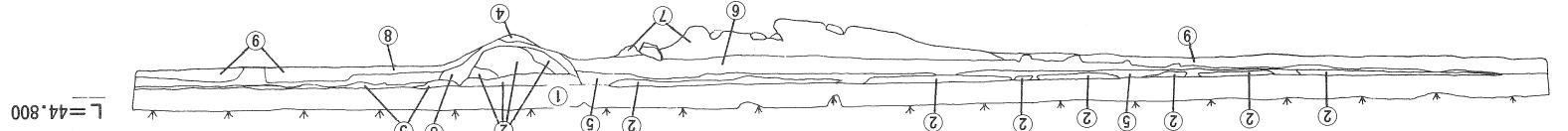
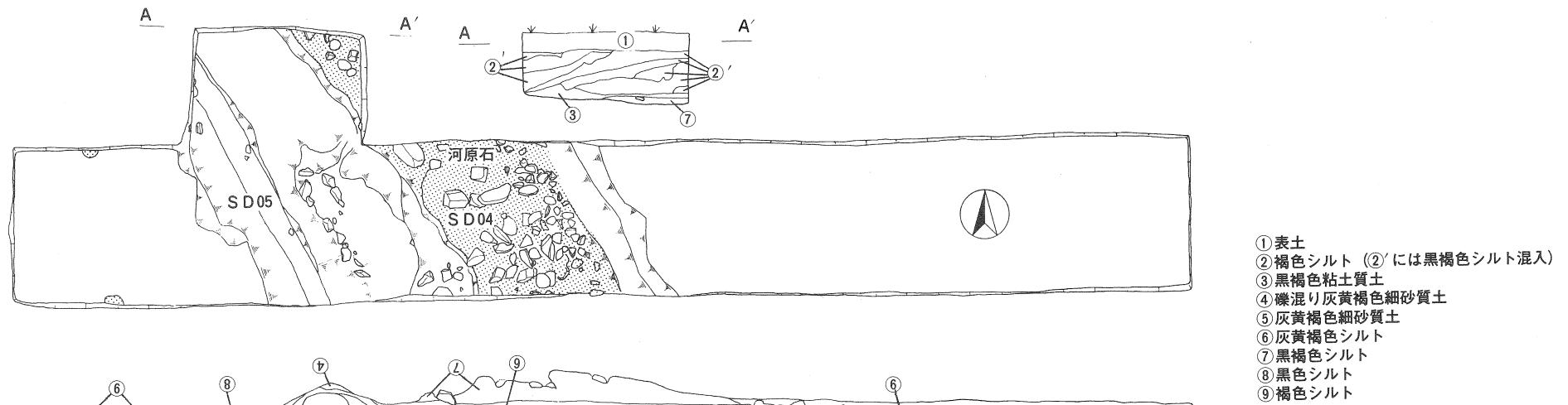
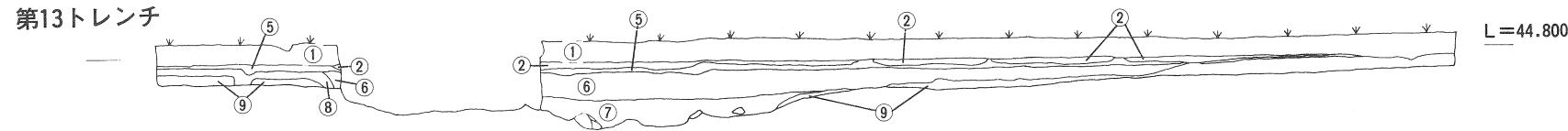
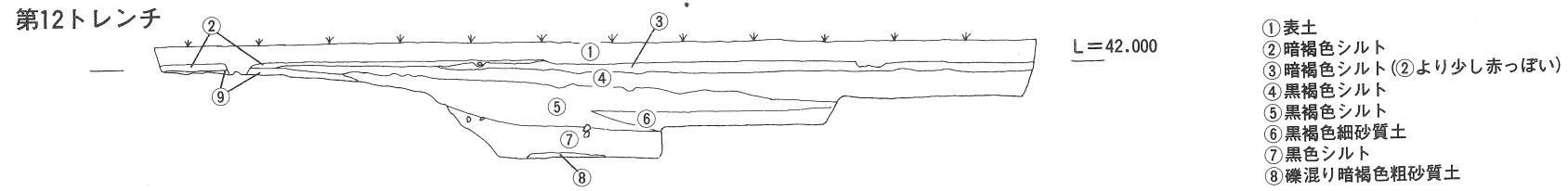
第7トレンチ



第11トレンチ

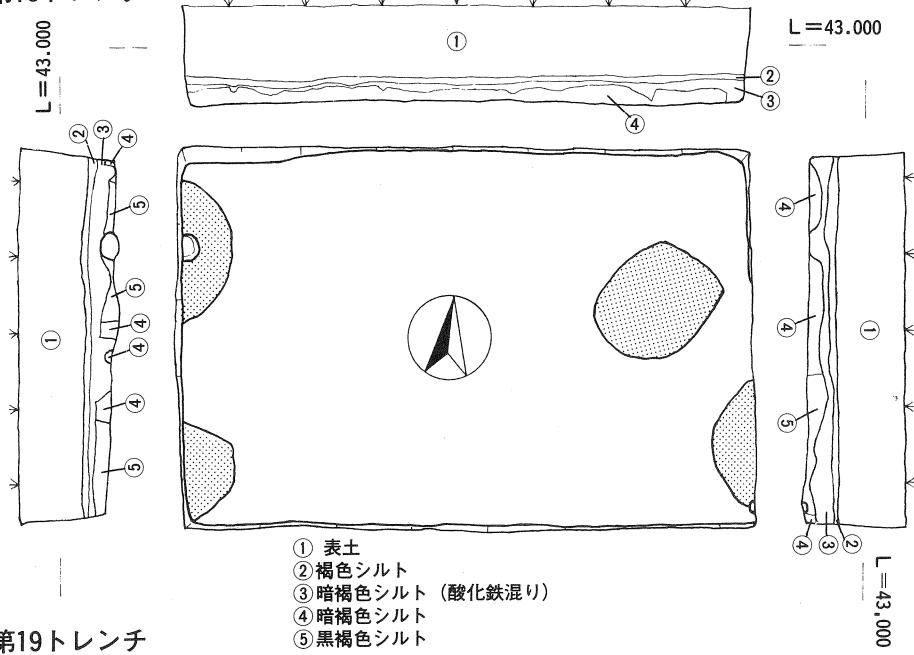


挿図5 第7・11トレンチ平面図及び土層図

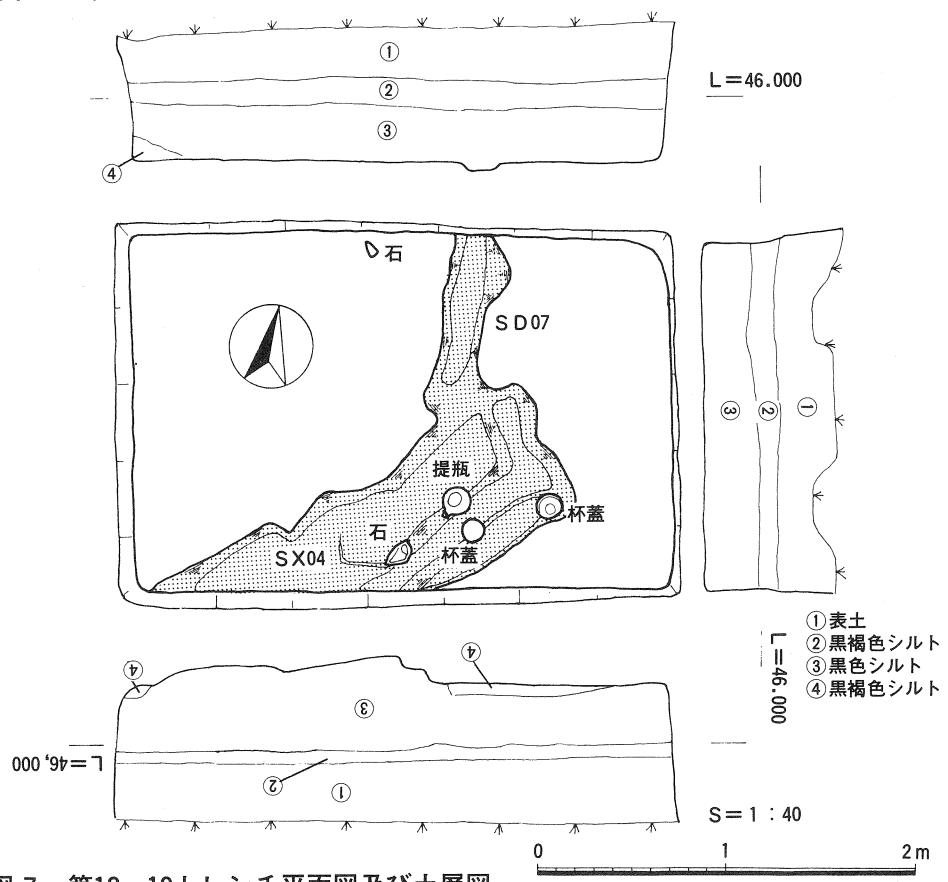


挿図6 第12・13・15・16トレンチ平面図及び土層図

第18トレンチ



第19トレンチ



挿図 7 第18・19トレンチ平面図及び土層図

第16トレンチ（T16）

T13の溝（S D04）が、この方向に延びているかどうか確認するため調査した。東西に設定したトレンチの西端で河原石の埋積した約20cm落ち込んだ溝（S D06）の一部を検出した。そのS D06の上層第2層は、T13の第6層黒褐色シルト層と一致する。遺物は出土しなかった。

第17トレンチ（T17）

T13の第9層褐色シルト層の東限を追求するため、T13の真東約28mの位置に設定した。耕土下床と約40cmの黒色シルト層があり、さらに10cmの礫混り黒褐色シルト、礫混り黒色シルトと続く。第3層以下の層は、東方に約4°傾斜している。第5層まで約90cm進んだが、水分を多く含むシルト層となり、作業困難となったため、調査を中止した。遺物は出土しなかった。

第18トレンチ（T18）

耕土下すぐに褐色シルト層の床土があり、その下の面が遺構面の暗褐色シルト層である。黒色土層は削平されてしまっている。長径60cm・短径50cm前後のだ円形のピットが4個検出された。遺物は出土しなかった。

第19トレンチ（T19）

耕土下床土と約25cmの黒色シルト層があり、黒褐色シルト層の遺構面に達する。トレンチの南側で土壙（S X04）を検出した。平面形は長方形を呈し、長軸を北東から南西方向にとる。短軸は約70cmであるが、長軸はトレンチ外に延び不明である。S X04の縁辺にはさらに幅20cmの溝がめぐり、この土壙は木棺墓の可能性がある。

遺物としては、トレンチ南西隅の第3層黒色シルト層より、7世紀初頭の高杯（須恵器）が、さらに土壙上からは杯蓋2個と、提瓶1個が出土した。

第3節 出土遺物

各トレンチからは、図化していないものも含めるとかなりの遺物が出土している。その年代幅は、縄文時代晚期から中世に及ぶが、内でも中心を占めるのは、弥生時代後期から古墳前期の土器と中世の土器である。特に、前者はT4・7に、後者はT11にその数量が多い。以下種類ごとに、出土遺物をみていく。

①縄文土器（挿図8-1・2, 図版5-1・2）

第12トレンチより出土したもので、深鉢口縁部片である。外面には横方向に幅広の条痕調整。内面には粗い指ナデ調整、または幅広の条痕を施す。口縁端部には凸帯紋が見える。縄文時代晚期のものと考えられる。鹿野町内初の出土である。

②弥生土器

甕（挿図8-3～6, 図版5-3～6）

4・5・6は、二重口縁をもち、外面を平行沈線あるいは波状紋で飾る。4は、外反する口縁部の下半分に平行沈線を施し、屈曲部の稜は外方へ少しつまみ出し垂れ下がる。

口縁内面はナデ調整。内面頸部はヘラ磨き。体部内面はヘラ削り。5は、直立する幅の広い二重口縁。端部は水平面をなす。口縁部に平行沈線。肩部に櫛描波状紋、平行沈線、貝殻腹縁押引沈線。厚手である。6は、強く外反する二重口縁。口縁端部は角張り、屈曲部の稜は小さくつまみ出されている。口縁外面は櫛描き波状紋とナデ。内面はナデ。頸部は左方向へヘラ削り。3は、退化し二重口縁で、短い。端部は丸く終る。体部の壁は口縁に比して薄く、肩は張らない。口縁内外面と体部外面はヘラ磨き。体部内面は右方向のヘラ削り。

器台（挿図8-8,図版5-8）

鼓形器台脚台部である。外面に4重圏の竹管スタンプ紋、その上下を5条と4条の櫛描き平行沈線で飾る。内面は、下方と右方向のヘラ削りで調整。

蓋（挿図8-7,図版5-7）

蓋形土器のつまみ部で、天井部内外面、つまみ部内面ともヘラ磨き。

③土師器

甕（挿図8-9～11,図版5-9～11）

9～10は、強く外反する二重口縁で、口縁端部は丸く終る。屈曲部の稜は水平方向につまみ出されている。口縁内外面・体部外面は横ナデ。体部面はヘラ削り。薄手である。11は、口縁が9・10より厚く、屈曲部稜も小さい。口縁内外面、頸部外面は横ナデ。頸部内側はヘラ磨き。肩部外面は櫛描波状紋。内面は左方向のヘラ削り。

器台（挿図8-13・15,図版5-13・15）

13は、鼓形器台筒部破片である。筒部は短く、「く」の字状に屈曲する。外面は横ナデ。内面受部はヘラ磨き。脚部はヘラ削り。15は脚部で、その外面に平行波状紋を施す。

直口壺（挿図8-14,図版5-14）

口縁はほぼ垂直に長くのびる。口縁内外とも横ナデで、その端部は細く丸く終る。

高杯（挿図8-17,図版5-17）

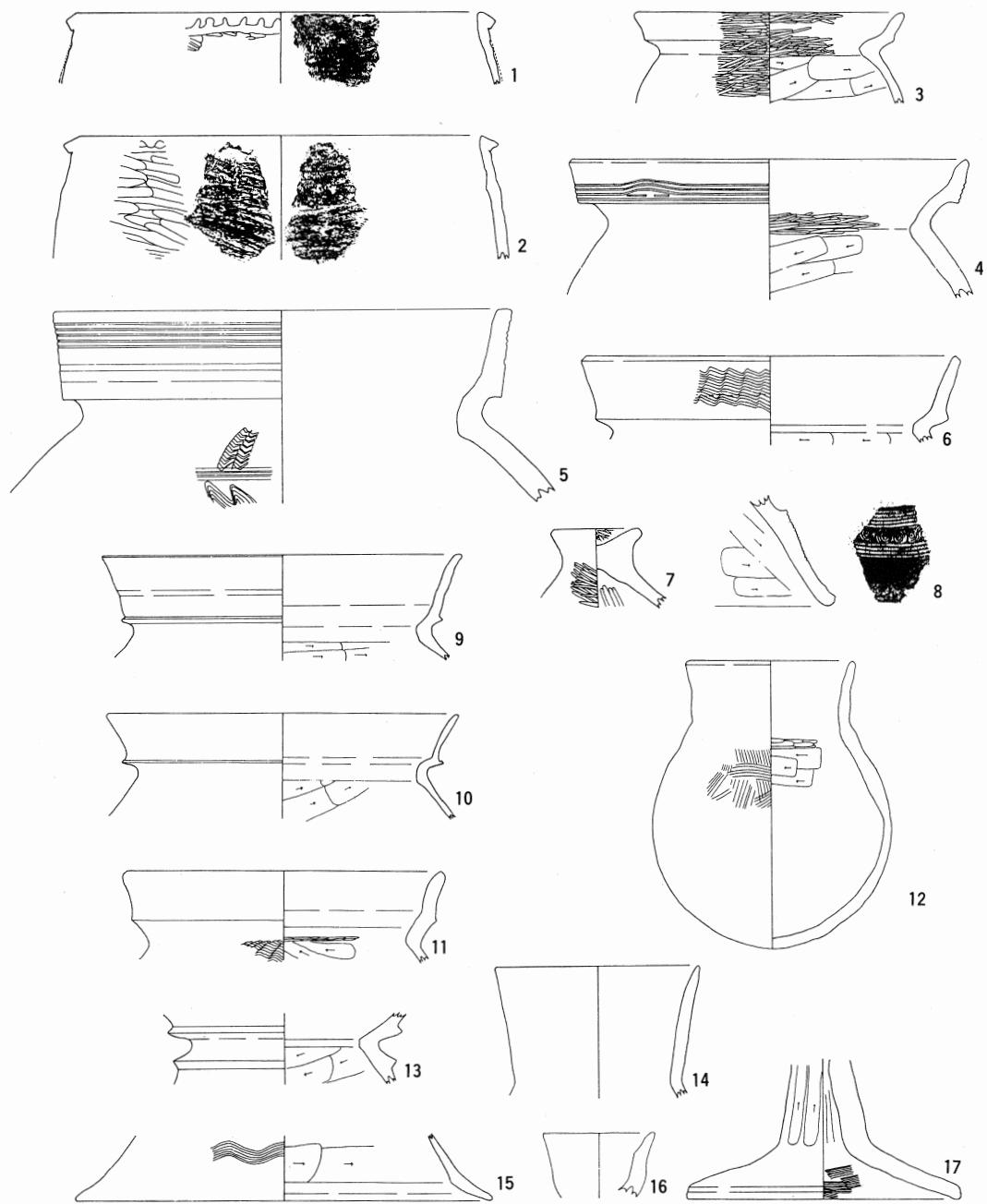
台脚部である。筒部外面は、縦ヘラ磨きで、筒部内面に紋り目あり。脚部内面はハケ目。

手捏土器（挿図8-16,図版5-16）

口縁部が大きく外へ開くミニチュア的小丸底壺である。手づくねによる成形後、口縁部をナデ調整。指先での粗製なつくり。祭祀的意味をもった用具と考えられる。

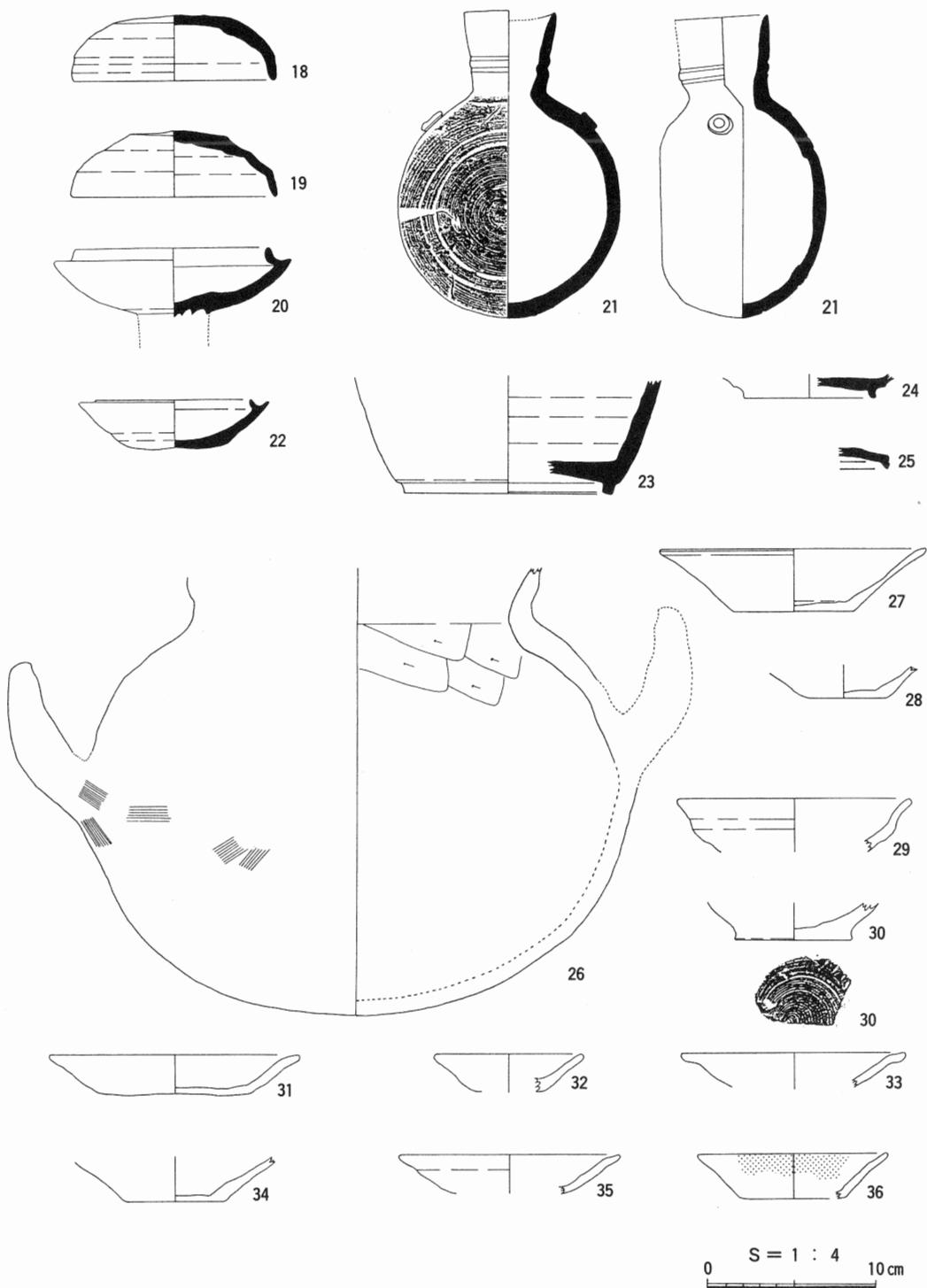
小型丸底壺（挿図8-12,図版6-12）

短く直立する口縁部と扁球形の体部をもつ。口縁部内外面に横ナデ。体部外面はハケ目調整。内面は左方向にヘラ削り。

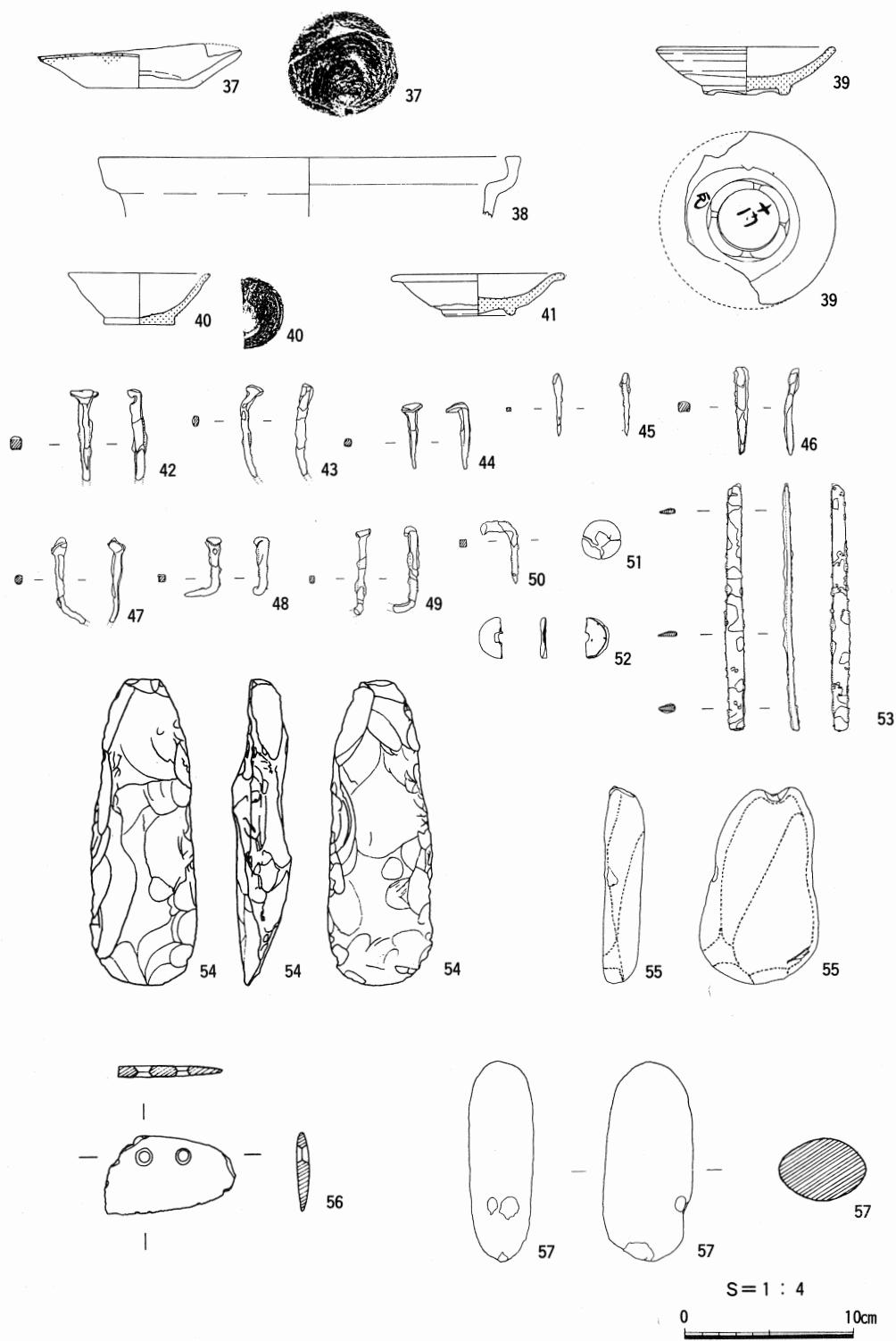


0 S = 1 : 4 10 cm

插図 8 繩文土器・弥生土器・土師器実測図



挿図9 土師器・須恵器・中世の土器実測図



挿図10 中世の土器・金属製品・石器実測図

甌（挿図9-26,図版6-26）

大型の甌で、口縁はやや外反する単純口縁をもつ。胴張甌に把手をつけた形である。外面は、全体的に摩耗がはげしいが、把手の付け根部分を中心にハケ目が観察できる。内面は、胴部上半がヘラ削り、下半がナデ調整。胎土は5mm大の礫を含み、焼成は軟調。

④須恵器

高杯（挿図9-20,図版7-20）

有蓋高杯杯身部分破片。たちあがりは短かく、上半が屈曲して直立する。杯身部は口径が大きく、底部から体部にかけて内彎気味になだらかに外上方に広がる。マキアゲ成形で、稜が残る。内外面ナデ調整。

杯（挿図9-22・23・24,図版7-22・23・24）

22は、口径がやや小型である。たちあがりは短く内傾する。23、24には、貼付された高台が付く。23の高台はやや外傾する短い逆台形である。23にはマキアゲ成形の稜が残る。

蓋（挿図9-18・19・25,図版7-18・19・25）

18、19ともマキアゲ成形後、天井部をヘラ切りし、段を指でナデ調整する。特に19の内面は、口縁部との境に凹線が廻り、口縁部は下方やや内彎気味につまみ出される。25は、平坦な天井部で、口縁端部を下方へつまみ出し、端面に凹線を施す。中央部がわずかにくぼみそうである。

提瓶（挿図9-21,図版7-21）

体部前面は丸くふくらみ、背面は台形になっている。把手は退化した円形の粘土板をつけたものである。口縁部は、やや外開きのろうと状である。

⑤中世の土器

中世の土器として検出したものには、大きく分けて土師質土器・瓦質土器・陶磁器などがある。

土師質土器（挿図9-27～36、挿図10-37,図版9-27～37）で、底部に糸切りのあるものは、27、28、30、34、37。口縁部内外面にススの付着するものは、36、37。色調は、淡黄橙色のものが、27、28、29、31、32、33、37。淡黄色が34、35、36。明褐色が、30。27、28、33、34、36、37は、T11先土。

瓦質土器（挿図10-38,図版9-38）は、鍋で、口縁部には鍔がついている。口縁部内側が角張り、稜線を持つ。外面は丸く屈曲する。

陶磁器（挿図10-39～41,図版9-39～41）で、底部に高台が付くものは、39、41。うち39は、四脚を削り出す抉り高台である。底部に糸切りのあるのは、40。38は、灰白色の釉の白磁（墨書き入り）である。40は、灰釉土器である。41は、浅黄色の釉を施している。

⑥金属製品（挿図10-42～53,図版9-42～53）

出土したものは、鉄釘、銅銭、刀子などである。うちでも、鉄釘の量が多い。T11の溝(にぶい黄褐色粗砂質土層)より出土したものがほとんどである。銅銭は摩耗がはげしく銭名は不明である。

⑦石器

出土した石器は、石斧・石錐・石包丁・敲石である。

石斧 (挿図10-54, 図版9-54)

打製石斧である。縦斧で、刃先端部に横方向の使用痕がみえる。石材は变成岩で、灰白色を呈する。重量は421 gである。T13の出土である。

石錐 (挿図10-55, 図版9-55)

全面に磨いた摩耗痕があり、ひょうたん型の石である。糸掛は、長軸と短軸のそれぞれの一端を打ち欠いている。石材はカコウ岩で、重量は268 gである。T7の出土である。

石包丁 (挿図10-56, 図版9-56)

一端が壊れている。残っているのは、全体の2分の1程度である。全体的に薄くよく磨き、直径6 mmの紐通し穴2個を表裏両面からあけている。石材は安山岩である。重さは38 gであるので、元は80 gくらいのものと推測される。

敲石 (挿図10-57, 図版9-57)

T7から出土している。長軸の両端には敲打痕があり、一方は一部打ち欠いている。石材はカコウ岩である。重量は286 gである。

遺物番号	出土トレンチ	遺物番号	出土トレンチ
1・2	12	18・19・20・21	19
3・5・6・7・8・11 12・13・14・55・57	7	23・25・32・38	14
4・9・17・26・30・40	4	24・41・54	13
10・16・22・29	5	27・28・33・34・36・37 42・43・44・45・46・47 48・49・50・51・52・53	11
15・31・35・39・56	2		

表2 遺物出土地対照表

第4節 まとめ

柄杓目遺跡は、鹿野城跡の北東の方向にあって、河内川と水谷川の合流点の東の比較的日当りのよい微高地上に立地する。

今回の調査は、団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業（一般）に伴う柄杓目遺跡の試掘調査として実施した。16本のトレンチ、374m²を調査した結果、縄文時代から中近世に及ぶ遺物・遺構を確認し、遺跡は水谷川に沿って東側に南北に広く存在することが確認された。

遺跡の始源は、縄文時代晚期に遡ることもできるが、少量の遺物のみの検出であってその遺構は確認し得ていない。その後は、空白の時代をもちらながら中近世まで存続する。

遺跡の中心となった時期は、弥生時代から古墳時代にかけてのものと中近世期のものであった。前者は平地部に、後者は妙光寺山山麓部に多い。

ここで、平地部を2地区に分け、仮称A地区・B地区とし、山麓部を仮称C地区とする。A地区は、T19・18・16・13・12・2のあたりで、観音寺山のかっての尾根つづきかと思わせる南北に長い三角形状の台地で、小字名が「寄田四」「鉄炮屋」である。B地区は、T4・5・7のあたりで、河内川と水谷川の合流点の真東の地域で、小字名が「柄杓目二」「柄杓目三」である。C地区は、T1・10・11・15のあたりで、周囲より一段高く、しかもほぼ長方形の台地で、小字名が「的場」である。

A地区には、遺構としては土壙墓、溝、柱穴等が在存する。T13・16の溝は何か、また何時代のものか、今回は確認できなかったが、かなり古い時代のものであることはその層位から推定でき、今後の調査に期待したい。また、T18では、径が約60cmの柱穴が4個、2×3mという小さなトレンチから検出され、その柱穴の大きさと密度に注目したい。また、T18付近の小字名「鉄炮屋」には注意をひかれる。今後の調査でその解明を望む。T12からは、本町初の出土である縄文土器深鉢の一部が数片出土し、大きな成果があったが、今後はその遺構の発見を期待する。

B地区は、今回の調査でその遺跡全体の名称として使用した「柄杓目」というところである。古い文献をみると、この地を詳しく説明したものはまだ確認していない。ただ、その地名の表現を、「鹿野筆綱」（享保21年、白妙著）は「シシャク目」、「拾遺鹿野故事談」（寛政6年、態谷道伸著）は「ヒシャク目」、「因幡誌」（寛政7年、安部恭庵著）は「比志也久日」、「鹿野小誌」（昭和3年、瀧中菊太郎著）は「杓目」などと表現している。因に、地元の人は「しゃくめ」と呼ぶ。とりあえず、本調査では「柄杓目」を「しゃくめ」と読むこととした。このB地区には、遺構として竪穴住居が存在した。T7からは3棟検出され、密度の高さからこの一帯には竪穴住居を中心とした集落が存在したことが推測できる。出土遺物も多量で、その大部分が弥生時代後期から古墳時代前期の土師

器である。鹿野町においては、今まで弥生時代に遡る遺物の検出例はあったが、遺物をともなった遺構の検出は初めてであり、今回の調査の最大の成果である。弥生時代から古墳時代にかけての村の構成等の解明については、今後の調査に期待する。

C地区は、葭ヶ谷入口の山麓にあり、周囲より一段高いほぼ長方形のプランで平坦な一区画である。調査の結果、この台地の土層は版築で、意図的に地堅めした形跡が確認された。T11の石列は、この台地の奥の山裾に山と平行して走っており、小字名「的場」という地名に注意をひかれる。検出された出土遺物として多量の鉄釘・煤が付着した灯明皿・古銭・刀子等があり、14~15世紀のものと推定される。瓦は出土していない。ここには一体どんは建物があったのであろうか。鉄釘は和釘で断面が四角である。夜は灯明皿で明りをとった。灯明皿は直径10cm前後で、多分エゴマ等を搾った油を入れ、縁の心に火をつける簡単なものである。「鹿野小誌」は、「鉄砲屋、的場等は鉄砲練習場なりしを知るべし。」と記している。また、「因幡誌」は、現在は気高町宿に祀られている志加奴神社の元の所在地について、「志加奴神社と云ふは此の神旧鹿野村に在り故なり 其地今鍛冶町と云う是也 天正年中亀井氏鹿奴在城の時、其社地山下の街心にあるを以て神祠を比志也久日と云所 芦が谷辺今田地の字となる に移し後、又宿村今地に遷せり」と記している。鉄砲練習場・志加奴神社・足軽屋敷・館跡・集落等々が考えられるが、その真相は今後の調査を待たねばならない。

T17・T12の調査の結果、A地区と妙光寺山との間には落ち込みが推測される。「鹿野小誌」が「末用川は元鳥取往還たりし赤坂越の麓辺より西折して妙光寺山と獅子舞山（観音寺山）との間即ち金堀を貫流して新堤を経、下河原に至りしものにして其地勢の西方に傾斜せる点より考察するも其然りしを見るべし。」と述べているように、A地区と妙光寺山との間には現在も幅約1.5mの小さな川（用水路）があり、A地区の東沿いを走り、B地区のT5とT7の間を貫流しているので、この落ち込みは、河川跡=末用川の旧河道と推測される。

図 版



遺跡遠景(南西より)

（昭和59年6月9日撮影）

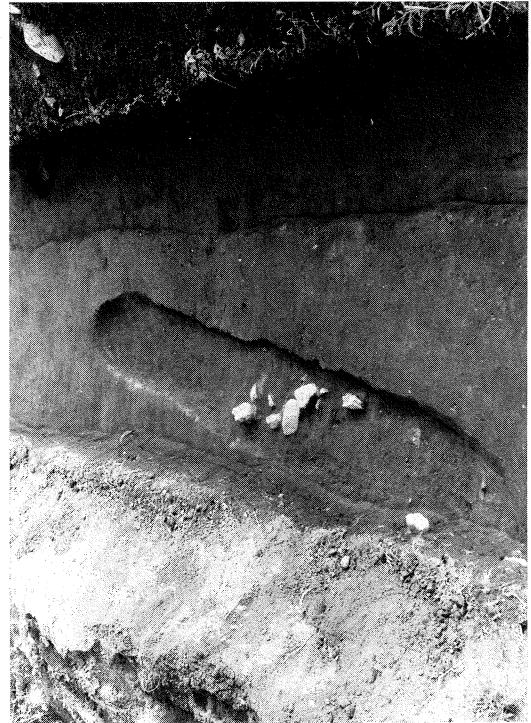


遺跡遠景（東より）

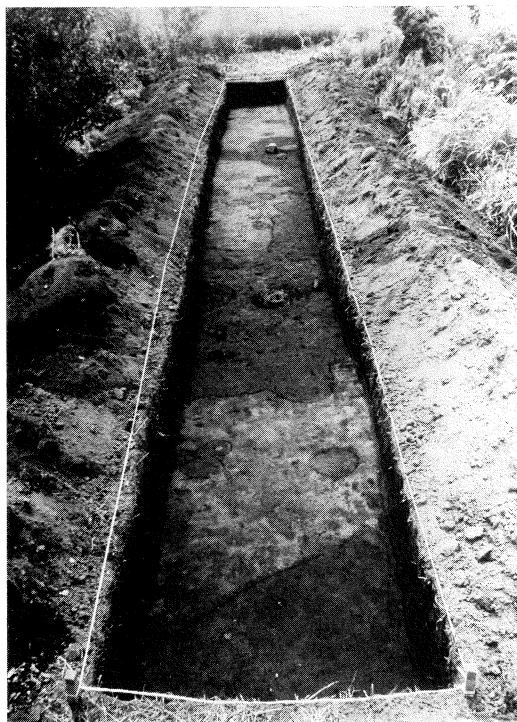
図版 2



第1トレンチ



第2トレンチ



第4トレンチ



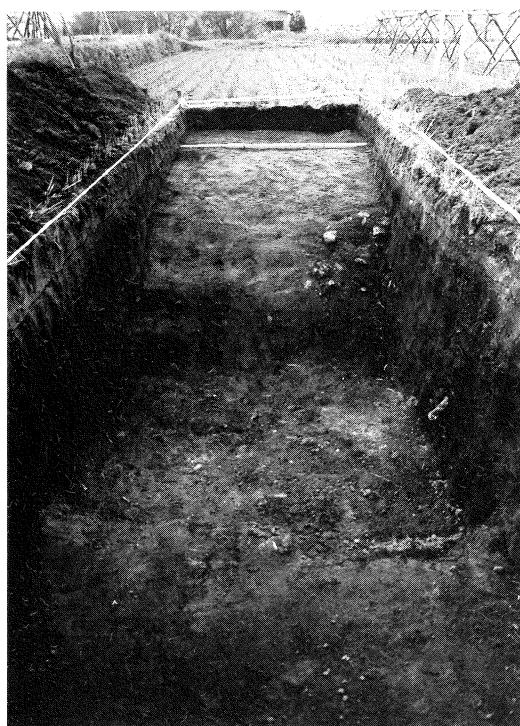
第5トレンチ



第7トレンチ



第11トレンチ



第12トレンチ



第13トレンチ

図版 4



第15トレンチ



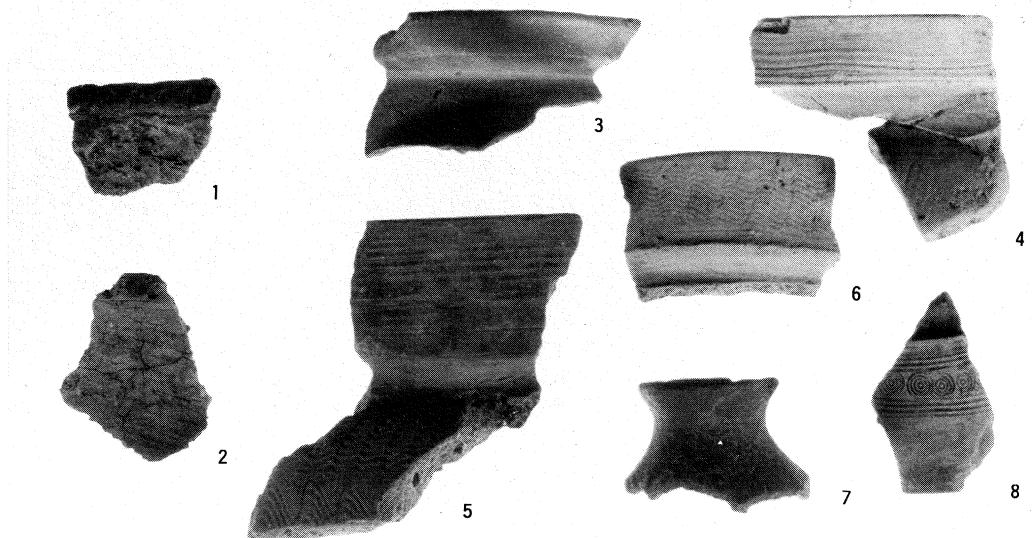
第16トレンチ



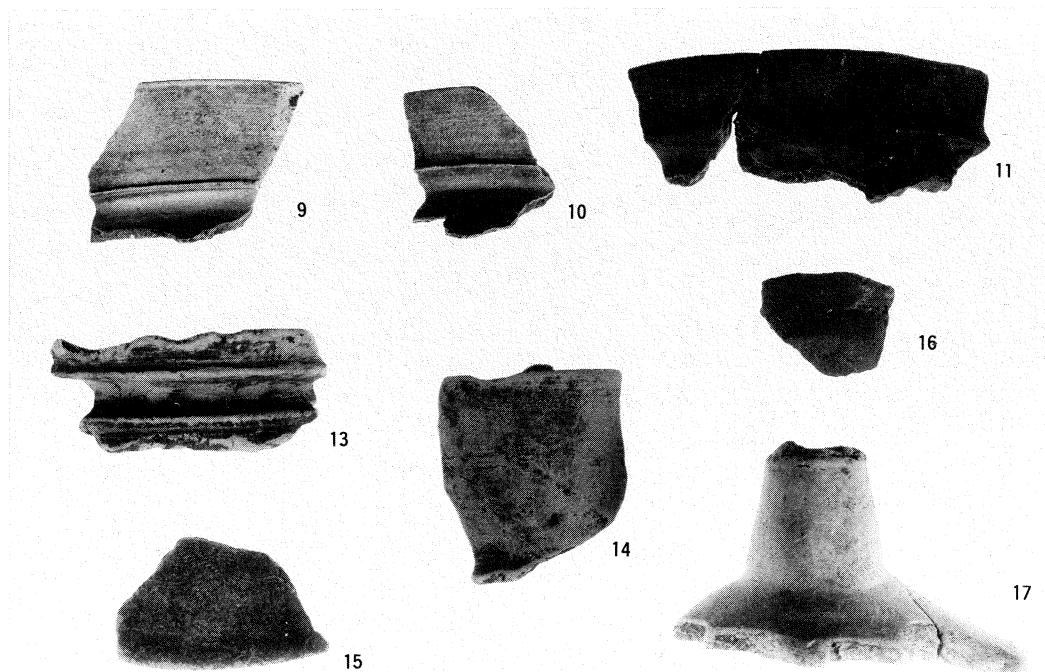
第18トレンチ



第19トレンチ



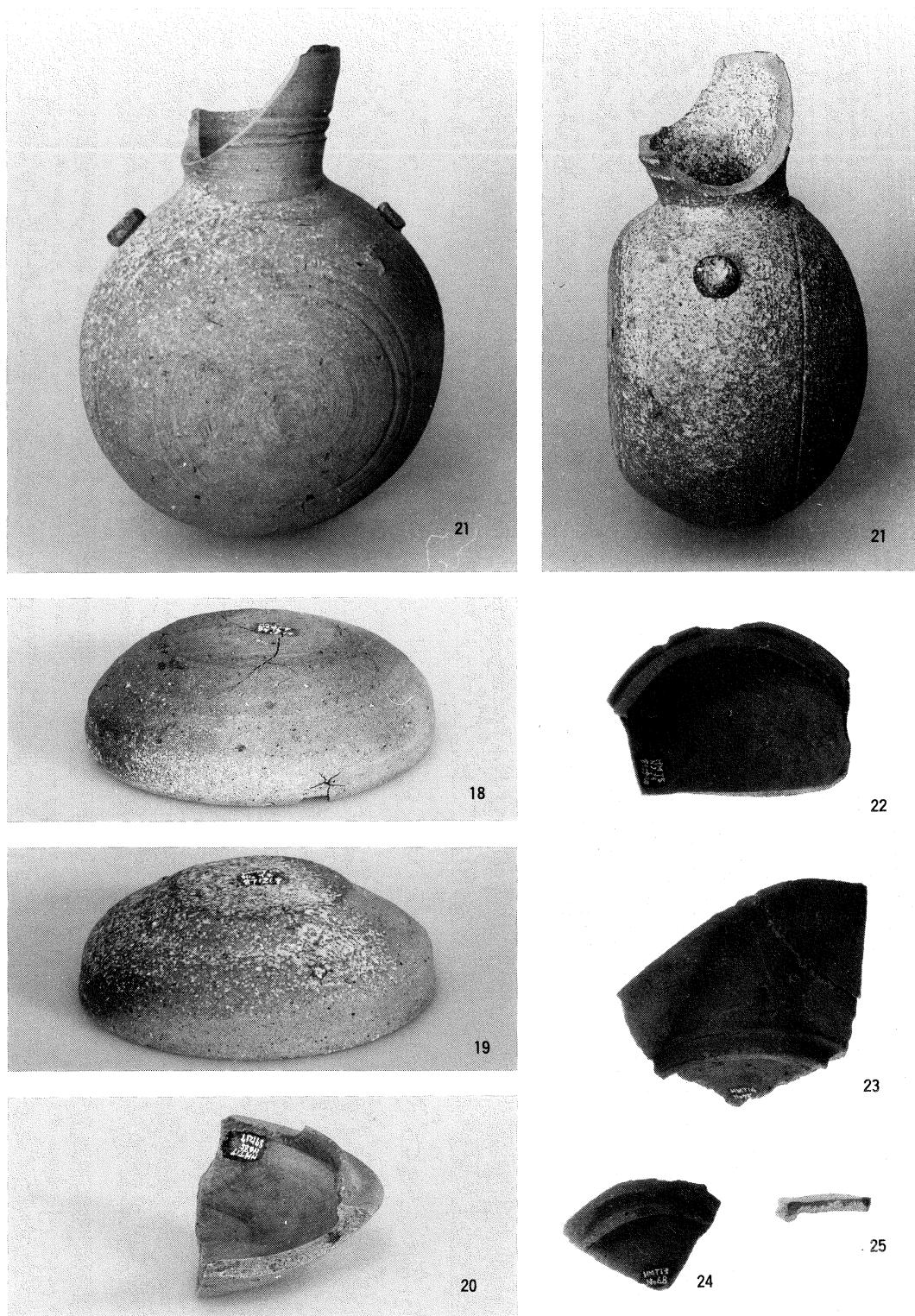
縄文土器・弥生土器



土師器

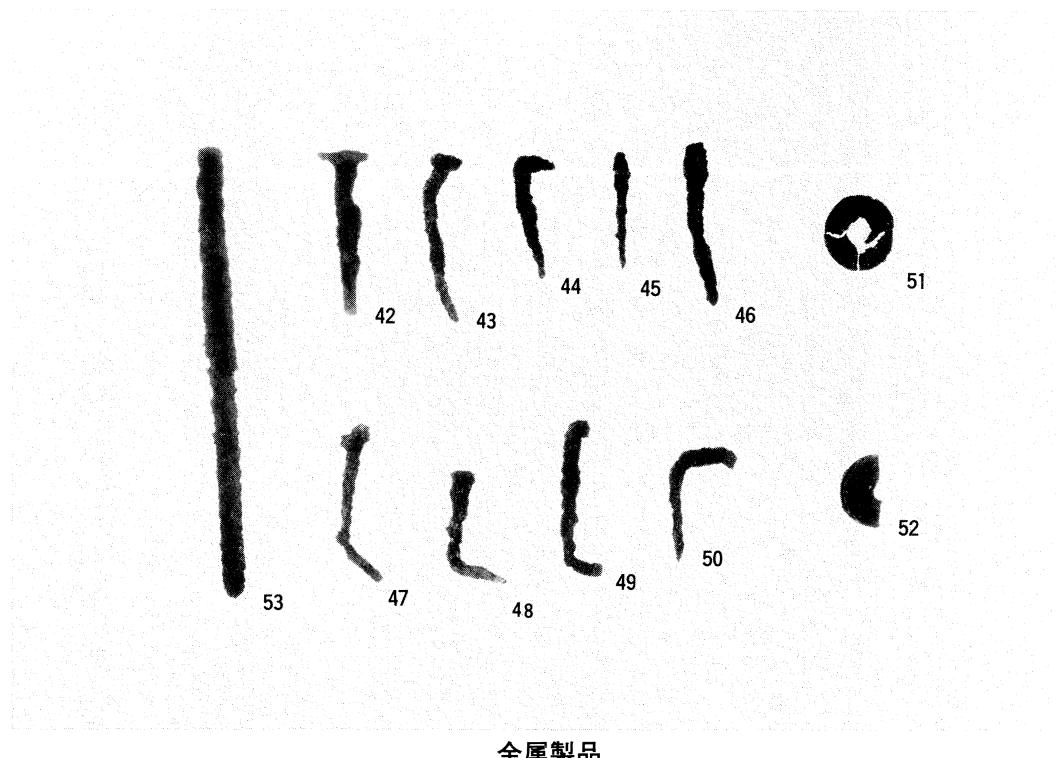


土師器



須恵器

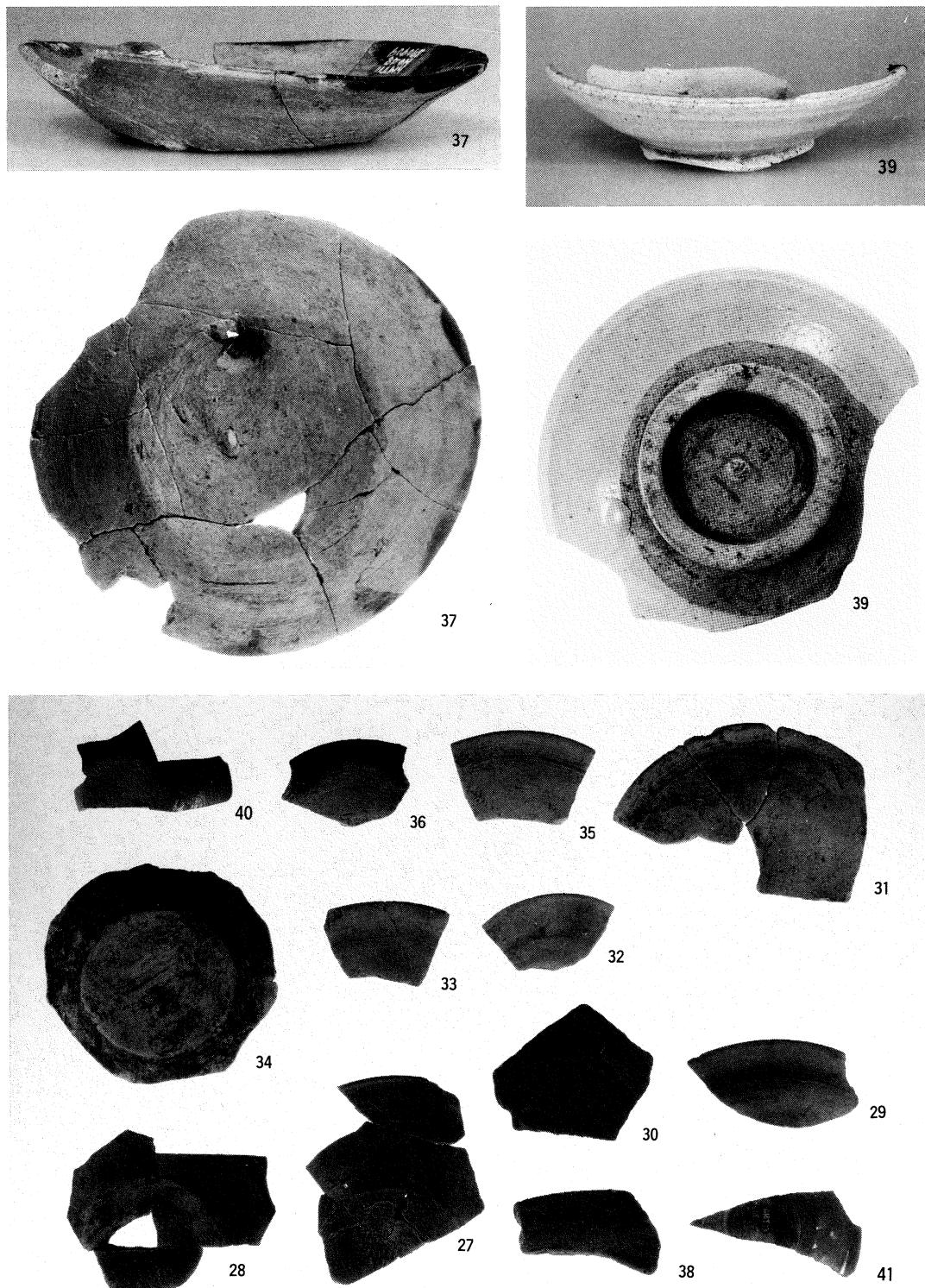
図版8



金属製品

石 器

図版 9



中世の土器

鹿野町内遺跡発掘調査報告書 I

団体営柄杓地区土地改良総合整備事業
(一般) に伴う柄杓遺跡試掘調査報告

発行日 昭和63年3月

発行者 鹿野町教育委員会
編集者

〒 689-04

鳥取県気高郡鹿野町大字鹿野1517番地

TEL (0857) 84-2011

印刷者 日ノ丸印刷株式会社

〒 680

鳥取県鳥取市寿町 915 番地

TEL (0857) 22-2248